

平成30年6月4日現在

機関番号：17102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07034

研究課題名(和文)固有語・借用語間における音韻論的制約の強弱に関する対照研究 チュルク諸語を対象に

研究課題名(英文)A contrastive research of strength of phonological constraints and phonological differences between native words and loanwords: A case of Turkic languages

研究代表者

菅沼 健太郎 (Suganuma, Kentaro)

九州大学・人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：00775835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、固有語と借用語間の音韻論的な違いに着目しつつ、トルコ語をはじめとするチュルク諸語の音韻論に関する記述的研究を行った。また、固有語と借用語間の音韻論的な違いは「音韻論的制約の強弱の差」によるものだと考え、この強弱の差に関する通言語的特徴を明らかにする理論的研究を行った。通言語的特徴の発見については、本研究中には本格的な研究に至らなかったが、今後体系化して進めていく予定である。また得られたデータをもとに、学会発表(計7件、内2つは国際学会)と論文執筆(1本)を行った。

研究成果の概要(英文)：We made a description of the phonology of Turkic languages, especially focusing on phonological differences between native words and loanwords. We also attempted to find cross-linguistic features of phonological constraints which cause phonological differences between native words and loanwords.

研究分野：言語学

キーワード：チュルク諸語 トルコ語 現代ウイグル語 カラチャイ語 音韻論 固有語 借用語

1. 研究開始当初の背景

音韻論的制約が働くかどうかにより、固有語と借用語の間に音韻論的な共通点と相違点がみられることがある。Itô and Mester (1995) は、日本語を対象とした研究を通して、このような共通点と相違点は、固有語に元々働いていた制約が借用語にも働くかどうかにより生じると述べている(働けば共通点が、働かなければ相違点が生じる)。日本語を例にとると、日本語においては、音節構造に関する制約は固有語にも借用語にも働いているため、両者の間で共通点がみられる。その一方で、語頭や母音間における /p/ の出現を認めないとする制約は固有語にのみ働き、借用語(但し古い中国語由来の借用語は除く)では /paNda/ “パンダ” のように働かないため、結果として、両者に相違点がみられることになる。

借用語にも働くかどうかという制約間の差異は、音韻論的制約がもつ支配力の相対的な強弱を示していると考えられる。すなわち借用語にも働くということは、それだけその制約の支配力が相対的に強いことを示し、働かないということはそれだけその制約の支配力が相対的に弱いことを示す。

研究代表者(菅沼)はこれまで、このような制約の強弱がみられることに着目し、トルコ語と現代ウイグル語を対象として、固有語・借用語間の共通点・相違点に関する研究を行ってきた。トルコ語と現代ウイグル語を対象としたのは、両言語が属するチュルク諸語が様々な言語から語彙を借用しており、借用語に関わる音韻論的研究に適しているためである。

研究代表者の研究により、先行研究で対象とされた日本語だけでなく、トルコ語と現代ウイグル語でも固有語・借用語間の共通点と相違点がみられる、すなわち制約間に強弱の差異がみられることが明らかになった。しかし、研究代表者の研究は両言語を対象としたにとどまっており、制約の強弱に関する通言語的特徴が明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。

i. チュルク諸語を主な対象とし、固有語・借用語間の共通点・相違点を生み出す音韻論的制約の記述を行う。

ii. 各言語にみられる諸制約を比較対照し、「音韻論的制約の支配力の強弱」に関する通言語的特徴を明らかにする。明らかにすることを通して、借用語に関する言語類型論に貢献することを目指す。

3. 研究の方法

当初はトルコ語、現代ウイグル語に加え、カザフ語を対象とする予定であったが、カザフ語ではなく、エスキシヒル・カラチャイ

語を対象とした(同言語はロシアからトルコ共和国内のエスキシヒル県に移民してきたカラチャイ人によって話されているチュルク諸語のひとつである)。

本研究課題では上記3言語を対象とし、言語コンサルタント(調査協力者)の協力を得て、調査を行った。また借用元言語や借用時期について調べるため、文献を通じた研究を行った。この他に、日本語などの他言語を対象とした先行研究の批判的な検討などを行った。

これらの活動に加え、国内外で研究成果を発信し他研究者からの意見を得た。

4. 研究成果

以下に主な成果を示す。

エスキシヒル・カラチャイ語では、母音調和現象に関わる研究を通して、トルコ語からの影響により、もともと存在していた /vʷ/ という音素に加え、借用語にのみ現れるあらたな音素として /v/ が存在することが明らかになった。また、これに関する研究発表を行った(学会発表)。

現代ウイグル語では、特に固有語にみられる現象であるウムラウト現象(母音交替現象の一種で、非円唇低舌母音 /a, æ/ が非円唇中段母音 /e/ になる現象)について調査研究を行った。そして、従来先行研究では /a/ のウムラウトと、/æ/ のウムラウトが等質に扱われていたが、そのような見方が誤りであることを示し、ウムラウト現象の再解釈を試みた。また、これに関する予備的調査の報告を国内の研究会で行い(学会発表)、最終的にまとめたものを国際学会で発表し、論文を一本執筆した(学会発表、論文)。

トルコ語では主に母音挿入現象に着目し、固有語と借用語の間で許容される音節構造に差異がみられることを明らかにした。また、これに関する発表を国内の研究会で行った(発表)。

また、3言語すべてに関して、アクセントに関する調査を行った。その結果(1)トルコ語とエスキシヒル・カラチャイ語では固有語・借用語間だけでなく、固有語間でもアクセントの差異がみられる、(2)その一方で現代ウイグル語では固有語・借用語間であっても、固有語間であってもアクセントの差異がみられない、という2点が明らかになった。なお、副次的ではあるが、これら3言語間では語レベルだけでなく、文レベルでのアクセントの実現にも差異があることが示唆された。具体的には、佐藤(2013)によれば、トルコ語では平叙文の場合、文中の各語のアクセントが実現する。しかし、疑問詞疑問文では、疑問詞のみのアクセントが実現し、疑問詞に後続する語のアクセントが実現しない(より正確には、疑問詞に後続し、かつその疑問詞の作用域内にある語のアクセントが実現しない)。すなわち、トルコ語では平叙文と疑問詞疑問文との間でアクセントの実現に差

異がみられるということになる。その一方で、本研究の調査では現代ウイグル語、ならびにエスキシヒル・カラチャイ語では平叙文でも疑問詞疑問文でも各語のアクセントが実現することが明らかになった。すなわち、平叙文と疑問詞疑問文との間でアクセントの実現に差異がみられないということになる。このように、平叙文と疑問詞疑問文の間でアクセントの実現に差異がみられるかどうかという点で、3言語間に文レベルのアクセントの差異がみられることが明らかになった。

このことから、同じチュルク諸語であっても、そのアクセント体系には様々な違いがみられることが明らかとなってきた。さらにこれらのアクセントに関する調査結果をまとめた研究発表を国内の学会、および研究会で行った(発表、)。

音韻論的制約の強弱に関する通言語的特徴に関しては、研究期間内では本格的な研究には至らなかったが、今後得られたデータをもとに音韻論的制約の強弱に関する一般化を図り、通言語的特徴を明らかにする予定である。

このほかにも本研究課題を通して、アクセントに関するデータを豊富に得ることができたため、今後インターネットなどを通じてそれらを広く世間に公表する予定である。

また、アクセントに関する研究を行った結果、同じチュルク諸語であっても、アクセントの実現に各言語で相違点がみられたことから、「チュルク諸語をアクセントに基づいて類型化する余地がある」という新たな研究の着想を得ることができた。今後これをもとにした新たな研究プロジェクトを立案することができると考えている。

参考文献

Itô, Junko and Armin Mester (1995) Japanese Phonology. In: John A. Goldsmith (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*, 817-838. Oxford: Blackwell.

佐藤久美子 (2013) 『小林方言とトルコ語のプロソディ ―型アクセント言語の共通点』福岡：九州大学出版会。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Suganuma, Kentaro, “ Reinterpretation of the modern Uyghur umlaut ” , Proceedings of the 13th Seoul International Altaistic Conference, The Altaic Society of Korea, pp.613-625, 2017, 査読あり。

[学会発表](計7件)

菅沼健太郎, 「トルコ語のCVCC語根に対する再解釈」, 2017年度ユーラシア言語研究

コンソーシアム年次総会、京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター、2018年3月、口頭発表、査読なし。

Suganuma, Kentaro, “ The morphological approach for phonological differences in Turkish vowel harmony ” , International symposium “ Current Topics in Turkic Linguistics ” , Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, March, 2018, 口頭発表、査読あり。

菅沼健太郎、藤家洋昭、アクバイ・オカン・ハルク、「エスキシヒル・カラチャイ語のアクセント チュルク諸語のアクセント類型論を視野に入れて」, 日本言語学会 第155回大会、立命館大学、2017年11月、口頭発表、査読あり。

菅沼健太郎、「チュルク諸語の韻律類型論に関する予備的考察」, AA研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 - 音韻・形態統語・意味の統合的研究 - 」第2回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017年10月、口頭発表、査読なし。

Suganuma, Kentaro, “ Reinterpretation of the Modern Uyghur umlaut ” , The 13th Seoul International Altaistic Conference, National University of Mongolia, July, 2017, 口頭発表、査読あり。

菅沼健太郎、藤家洋昭、アクバイ・オカン・ハルク、「エスキシヒル・カラチャイ語の有声唇歯摩擦音」, 日本言語学会 第154回大会、首都大学東京、2017年6月、口頭発表、査読あり。

菅沼健太郎、「現代ウイグル語のウムラウト現象に関する予備的考察」, 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター、2017年3月、口頭発表、査読なし。

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅沼 健太郎 (SUGANUMA, Kentaro)

九州大学・人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：00775835

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()